繪本小栗外傳

三篇

五

へ13
3249
7

へ13
3249
7

昭和十一年
一月二十四日

神戸市立図書館藏書之印

小栗外傳 卷之十五

東都 絳山戲編

第九六編

怨家を討得て孝義を表す
佛堂を再建して因縁全し

此時結城持朝再びやゝ〳〵はゝ事既にこゝに至りて何をか躊躇して
諫を聽て弁のゝごゝ必ず腑を嚙の患あんと速やかに持氏に長嘆して宣ひ
けるは我不明にして注秀が諫を信じ。今日に至りて注もゞ己が孫を拒むを
あゝ孫ども。危急の附に望んでゞ注秀が子孫を
彼と勇ましいことを云はゞどさもゞ命の惜きのゆゑ。罪を部僧に負て和を
こゝろこの臆病さよと。世の人口ふかからんと甚だ惜き事なるべし。斯のゆゑ
あゝ和睦奇し故のごゝ。鎌倉の義頼を倣ってもみる我を慢り。命況りちやれ

諸侯おのゝはじ生ゐのぐゝへく恥こんより。死して勇豪の名を残さんこと豈際ふ人
やゝぶやと。兼ゝ氣をめいゐのりきり。持朝呵ゝこうち笑ひこゝ物ゝ狂ひまゐるや。
爾ゝまこゝこれ匹夫の上ゐりいらで大ねの名むなとことうハ今ハ生害あるゐらば。
不明不知とも人ゝゝさん。聖賢の君ゆゝて逆臣のゐゐ。背付不正のゐゐわゝも。
甚非を知りゝゝ佞臣を罪ゝ。明君の名を全ゐ。万民徒ゐ伏ゝ。和漢ゐその例勘
かゝらば君今詮秀を罪ゝ。先非を改めゐりんゐ。誰ゐ命を恥ゝゝさハ。基氏ハ此
地ゐ基業を立ゐのゐ。幾許の勤労ゐるおぼゝめとゝを一人の佞臣のゐゐ。被ゐる
某顧のゝとく捨ゐんと。不孝ゝゝやいゝん不明ゝゝやいゝん小事をりとゝ大事を
緩りゐひゝと言語をゝして疎ゆゝゐ。扶氏ゐ漸ゐゐ離ゝゐるひゝゝゝゐ。ゐ
過てりゝ汝宜く斗らひ給ゝ。ゐゐるゐゐ持朝ゝゝび甲斐ゐゐ某ゐ言ゐ離
ゝまゐハ幾許の賜りのを知るよりも遥ゐりて忝ゐゝ。感謝ゝ。それゐ

俄ゐ郎ゐ命じ一色詮秀を呼ゐゐ。忽ち罷りまゐて詮秀伊化ゐ
のひゝん。陣中一人の人影をゐんゝと報ゐゐ扶氏ゐゐゐと笑ゝゝめゝいゐく
詮秀ゐ佞悪を憤りゐゐ持朝ハゝこゝゐめゝと不審ゐゐ。おのれゐゐ勢ゐ
をゐ鎌倉ゐ残ゝて扶氏ゐを守護ゐゐ。ゐハ僅ゐ数十人の従者をゐゐ赤軍
の毛ゐる。武蔵国府中ゐ敗ゐ小栗ゐ陳ゐ踵ゐ。斯と案内ゐこの邨小栗
助重ゐ家扶持房とゐゐ憲実を救んと上州白井ゐ到ゐるとゝ。泥倉勢ハ
京軍の殺ひ来ゐるゐ。ゐゐ。一色詮秀同付家をゝめ。ゐゐ。ゐ佛
引退ゐゐ。案ゐ相違ゝ。憲実ゐ對面ゝこれゐ三ゐ一所ゐゐて一色と
討ゐゝ。武蔵国ゐゐ生ゐゐゐ一色ゐゐ鎌倉ゐ逐ゐゐゐ。
鎌倉ゐ押ゐゐゐゐゐゐ。家扶ゐ小栗ゐ詮秀をこゐ。ゐ思ゐゐ
泥倉どゐを襲ゐんと忍びゐゐ。ゐゐ泥倉ゐゐ同国ゐゐ

陳取て居る処ふ只今結城打朝小栗が陳に来りなればいと疾り急ぎ陣中ふ着じ入對面を互ふ一別後恙なきをいとぶかさて持朝申さうは世回の一乱鎌倉殿のおぼしたるよりあくまで一色淦秀牧半こうんをもって忍び家枝憲実を淦さとほよ発れり。ちうふ近日淦秀が手こうの悪行一附ふ露顕し君ふく憤ふせるひ。そ罪を糺んと世ことのふふらや彼方へ移落失ね淦倉どの足を焼るひ。牙の不羽を恥く生害あくんとする式。某多くふ涙とぶめまつりしうり。これ君と思ふのみのふだ。今淦倉殿失ふのふぶ本国忽ち乱れ京都も危ふく天下の患ひさくん。より速よ京淦倉の山中に和睦あくんことを頼くふ。貴ひ足下この陣ふ居うるふ式。すみってこれを議んとを不知足下が意奈何と問へば。小栗去んぬ言ふ々ほふ。ふも心を用ひるふぞ某ふ不淦倉の世臣ふるを人昔ふ近ふる

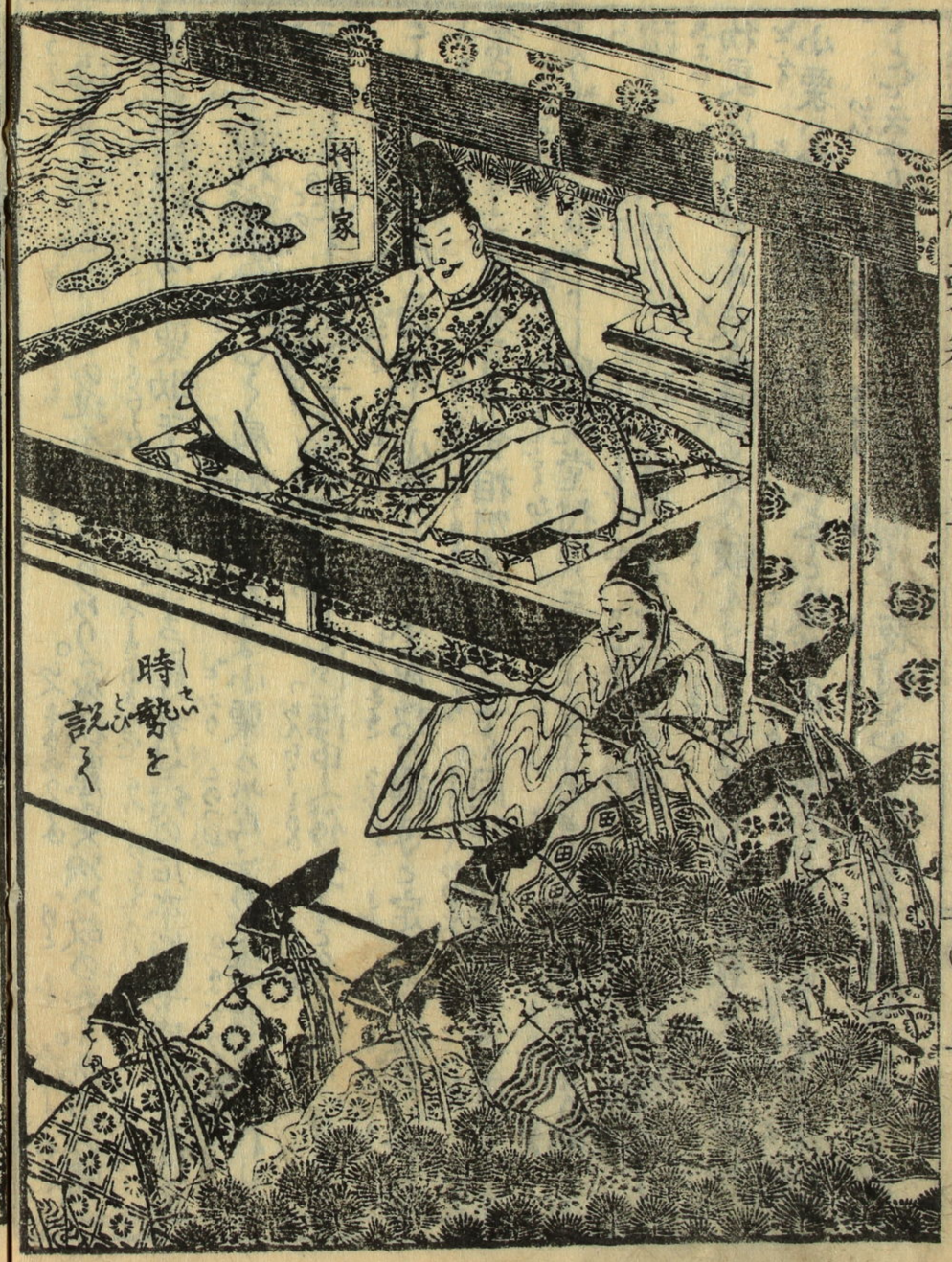
仕り深く恩を蒙れり。一且淦者のあれば勅命を受れどいかぐ出奔式高ぶ既ふ今打軍家の命によって鎌倉へ押寄ぶ身のかく時躊躇ひ淦倉度よりうくんとの忍びくそれ某ふさくふ。ふ後もこの意ふ然れども淦倉度の山勘事を蒙りしりのるとぶ。仏中のこと父へあぐんふよくなく仕りしふ足下のこくふふうせのふぞ嵯。我くが想ふ色のこと打氏云よ父へ上ふうぐ。両家枝よく淺ふて和睦斉んとと頼ふ式父へ焼ふ持朝うぎりなく弃びて忠義の志を感じ。その后助まこうへ一色を討ん為ふ。某千辛万苦して打軍家の山紀を蒙り。今回討ふ対ひ父の仇ゆれば。お朝臣ふ式ものくん世ふ深くふ患ひのひを足下ふ頼ふ式。去年某女児を怪獣ふとられを足下が郎党の们我力ふ仕て是ふ取ふ

其所の労に報ひんとて暇こと〻辞して一色を討とりて報へよと仰せられ
けるに平日みこゝ病ふこと〻なれば。あのゝ〻び戻ふ為し。通倉に至りつゝ
一色の弊らふくを見ざることあれば心服のゝ〻〻。淫秀がお辛めに
紛〻へ其初静を窺ひそふ京軍の勢ひ日〻ふ盛んなり。鎌倉方は日毎に
微しくなる。武蔵国の陣を逃げ持況堂村の賊横山安秀が守ふ
思ひよ。お辛に紛れ逃げ去るりの立退く告知ふせり。斯こゝろを用ゆること前
の労を報んとて足下仇討とあるべく我案内をせんぞほゝと忠こゝろ
小栗大きふ喜び好意のほど感佩を郎党池庄司をとゝめ人〻ことに汝軍
一般に生く。前言空〻しくふねを感謝せり。斯く小栗い西家枝に舎し打初の
笑へばることを物語ふこゝ長んで頃常〻いざらば和睦速ふ調へよわふれ
ゝとあ家枝小栗の人〻打初に通倉に時り持氏に入まとまとそ

打氏公い不明ゆゑて人〻を退けあり〻を慙愧〻のへい人〻も忠誠の至ぞれを
畏むぞ。原来これ仁君忠臣の徒るまぶ互ふ公解く。君臣笑壺の舎ぞ
なーふり。それより不日ふ家枝持房京邪に生ず。将軍家に入ふ〻〻
〻〻鎌倉どの今回のゝ夢くに意より半〻あぶ一色淫秀已通〻ふの
牧事〻〻〻ことおりひ家枝憲実を捨てるわより。爾〻ふ京軍の勢ひ
強く。通倉方衆〻ふ微しくなりしほどふ斯〻い禍ゝ〻ふ及んと孫に出奇し
日以志合を通ひ〻ける。相州の賊横山とふ〻の方ふ分れ〻〻ほし淫秀
〻を知るゝめ今更淫秀ふ敗北ぬるを深く後悔せ〻ほ〻〻〻〻〻〻〻〻
とあると結城打初これを止めすいふ。某等〻陳に〻〻〻〻〻〻〻〻
淫秀に某が父禅秀の亡びも淫秀が逸言ふ〻て通倉に〻〻〻〻〻〻
半ふあゝねか知りぬ結城が云をゆめふ打氏公のに半に傷〻〻〻〻〻

三人相議して村氏父の仇足利より。尚は仇底を尋ぬる。持明ゞ〻〻注秀
といふ侍若の為に正しき仇も掩れさせまじ癖ゝとせしの〻ふ差ひ迫
足をとの君今逼金み在まさば東国忽ち乱れ世八合戦の街
とゝ〻ん殺くハに和睦ゆつく。故のごく水奥の中と成ゆゞ。天下の大事
何ゝこれよ志ゝと伊へ〻ゆふされば。斯波左兵衛義淳は側ゝ侍ひれ
家枚村房ゞ〻を進を生くゝ〻ほい基嚮ゝ〻せ〻ハ只今村房ゞ〻を上
処し速ゆに許容あまじと諫〻せば軍家も実ふりとゆば〻則ちに和睦
ゆゞくれに出を村房ゆ賜りれゞ大ゝ喜び感佩ゝ塙ゞ書を袖ふ〻くいそぎ
遠参より村氏ゝ〻ゆ〻ふされゞ。ゞて足を覓〻ゆふ甚懇なはに和睦の
書ゆれゞ喜びゆゞと大ゝ〻ゆふゞ。西ゝ向ひく恩を謝〻。人〻ゆもとれ次示〻
ゆふゝ〻ゆまび斜ゆゝゞ万歳を唱ゝ祝〻ゆ。ゝとれゆふ及ぶも持明ゞ

忠誠ゝよりと恩賞の地を数多ゆゆり。家枚憲実次ゞ故のゆく。犯るゆ職ふ
復〻。家枚村房小栗助手ハ父の仇を注秀を討の后本願安堵さまゞ生乃
旨命あれゞみゆ再びく感謝せり。とゝゝ小栗ゆ此序をゆて妻照夫ゆ横山を
討さ〻〻く。此より〻〻へ上ゝゆふ何ゝ苦〻ふ陸中へ住ふゞ〻命ゆれゞ。ゞ〻〻ゞ
く。家枚村房ゝ相続〻。小栗ハ追手家枚ハ溺ゆと定め。その勢力合五百
余騎。永享二年九月中旬相州逼金を立く。同国太任の府ゆ著ふり。足
より横山ゞ居をトし。横現堂村へハ三里ゝ程〻ゆ道なれども。昨日より雨ゞ
降り〻路次悪〻しゝ。猶〻ゝ夕晩ゝ及ぶハゆも便り悪〻しと。太任ゝ陳ゝ〻ふ
初更のゝ比ひより天色晴〻ゝり。皎くゝる月のさやけきハ白昼のゆくゆり。程ふ
小栗ハ今宵敵の不意を討ゞゆゝと。後援兵ゆ助高をして村房ゞ陣ふ夜討の
ことを云ゆりしゆ村房も小栗と同〻く夜討をかけんと。ゝまも便ゝ小栗ゞ陣ふ


将軍家
時勢を説く

義淳
講和を勧む
斯波義淳

まゐるあぞ。途中みゝくゝあ使行遭ひまゐらせあ大将の意同じくとゝびあ互ふ
主命を通じ各陸よ立還りこのはを報ぜれば斯まで符節を合せごとく
出陣の吉兆なりと大将も士卒も喜びあひ急ぎ桂児堂村ゆ赴けり扨
又横山安秀方ハ鎌倉殿京都よ叛きのふを一色が許より告まゐれば限なく
喜び。こハ我が運の時至れり。急ぎ一色よ加勢をゝと國ゝふ散在せ佐所の
部下どもを招くゝ。既よ一千余騎よ及びしゝ。足利の勢ゆくんゝ強し
いざや絳秀方よ加勢し。奇功を立てく。鎌倉殿の兄を家り故の所領を安堵
せんと殆山塞を生んとする所ふ忽ち一色絳秀腹心の郎党僅よ六七人を引て
權現堂村ゆ忍びまゐり。鎌倉の光景を物語暫附忍ばしあハれとあるよ横山
案よ相違し。斯くゝ我が身の浮沈いとゞめくんとゝ思ふよ京都鎌倉に和睦
ありて小栗家扶あ来るとして此地方へ討ま向ふはし。佐人ゆ大きゝ中絶る。

今ハ逃るとも脱ま沼じ此上ハ運を天よ任し討ま出受とれと戦ひ。うち勝も
ま佐ゆどるくハ今の世の人ゆ非よ住ひ小るの栗ゆ汚れ又稗ゆ付定めく。
彼方此方とさゞめくハ鎌倉の大名のうちゆハ味方ま佐りのなれはもあれど。
然るとゝ絳秀より鎌倉殿ゆ佐人ゆ謀叛ま佐ん京都と傾
くんゆ中ま平切只我よあんそいうる大国と領せんも公のまゝくんとまれうし
不供ホとゞめ部下の悪徒のうちゆも称津今夜又浅草舎名を天高
軍吾南宮山行方知相模鬼王丸蛾門太郎同次郎熊川入道同子ゆを
宗徒の人とゝ佐勢於合一千余騎桂沢堂村の基よ彩り近辺の地沢
代官と支討ゆ今浪米穀を掠め奪ひこれと兵粮の料と准備ハ入ゆ
ちく詰ま行よ。小栗家扶の勢太住ゆ陣ゞるゝと勝て存候ゆ中ゝ金く
処の雑卒還り来ゝて報れば一色を佐ゝ横山の眷属うち集て行義

ある時は撫山太郎班を出くしてくれられ敵の案内を知らざるうへ、いまだその備整ふまじ。今夜逆寄してこれを討ハ難卵を破るより易からん。人々奈何おぼしめしやと湾うれ述べられが人々此議然るべしと云へども既にその用備みさんとしたまへ次郎安春ハ只今弟安嗣ハ照天の故とりて怨と憤ハ甚中平生睦しからぬ今此浮議を聞て道理なれバ只功を奪れんことをこれを妬こと同く席を進ませ太郎殿の宣ふ処その謀ハ似られども甚危し。之を奈何とのれが凡夜討朝うちなどいふハ寡を以て衆を破るの術なり。然るに今回のことハ足と友と味方ハ千余騎の人勢なり敵ハ僅に五百騎と云へ小勢を持て大勢を討んと此地方に同ふ者どのりのいうでもあ役の心沼なりとん爾るを怪しく逆寄せバ必ず落に陥て大なる破をとん初度の軍に打負ハ味方に徳きはのて始終の防戦あぢつ迫只望く宇ん

敵の衆と窺ひとれを討ハ者くほど言巧くくりけるハ衆とれに惑ひ且小栗が武勇を恐怖ハ遂に次郎安春が異ん同ひ夜討の義然ること尤明日討手差向ふべ防ぐべしと何の備もなきに傾く運の来なるべし。去程に小栗判官代助重ハ家扶房と絡を定め撫山が山塞に至り夜時既に二更に及びぬ。撫山方ハ明日ハ敵の寄せるなれバ稿しきハ今夜斗を酒と成ぐ飲ぐ臨べと甲夜より大ぶも士卒も酔こそして熟睡とれバ寄せられど知るのを小栗ハ塞中静に物音なしを不審と云知て後背の方ハ高く山聳り前ハ平地なるを深く堀とり掛るが足ハ切ぬく城門をたてうけ置りこれハ塞中より言ハ出ぬ怠を搭と下へかんりうけ恰も固の城ようなるに小栗ハ塞陣に在方ハ之れより池在同を指ひくいふ汝平生水流を好ぶり此堀を越く對ひの搭

渡さんとすきやとありされば庄司畏まりて堀落に至り檜を引き上る処を渡ふ。
その間五間わどもやあらんと云ふ所より堀の水より一丈余も切岸なる二丈
仰ぎさんるふ此方の大樹と彼方の大木と梢の枝を接へり。庄司と云ふ人れ
より急に彼木に攀上り梢の枝を伝ひ。ひらん分く數ひの岩ふやり立きまに只
猿猴が梢を伝ふ如ふ何年をとりふ彼引る檜を由縄にかけ。
扇と開ひらきさし拡ろり此橋の左の人分りせば二三十人ならぶくを訪じ
ひきに只一人の力をりて容易下へける庄司が力のわど目を驚るとぞ云ふ。
小栗大よ喜ひ庄司とも今夜の一番ふるれ続けや人く渡せや若ども下知を
かく其身ふ檜を渡せば誰とれよ後ぐき我劣らじとうるれ。
此ふらふも風雅後花田辺の兄弟ハ庄司が比類なる先生と我ふ人く
空うるさきと六人の人く一般ふ門の扉ふまとりけて鬼く声と神ふ
さしも大きなる門ふ扉が。双の大力六人にて押ふとぶ動ふくとうどれ
ぬ。紳ふ貫木おり折く。扉ハ八字ふ開ひらこの物音ふ熟酔色なる樵山
方寝ぬ醒く慌忙きやふや夜討の入ふ寄ふ太刀ふと立騒ぐ叫喚地獄
の罪人が呵責ふ逢ふも如ふ此府衙ふまたまりふ家扶房山上ふ
塞中の光景を窺ひ居りしが俄ふ立騒ぐと門の沸ふ騒くなれば小栗
責入りしぞ後ふ紙ふ人と其身先ふ山を下ふ敵の兵ふ
躊躇べ一時ふ塞中ふ入く開を
おどうれいく乱ふ我先ふ逃ふとさもぐ家ふ徒の人ふ敵ふ小勢なる。
長途を走れば伏わどのうのれ引つんで討れと云ふ入分ふ二の木ふ
支へり小栗が郎党後藤兄弟ハ渚軍ふ魁ふ二の木戸ふ入ふ賊ふ
称津今夜又渚草舎名若大高軍吾。おりわひく防ぐ

間もなく風間次郎正員、横合より責かゝるを勢ひ烈しふ今夜又もとゞ一上洛を
突伏さり。舎弟の軍吾の為人を見て踊りかゝるとゝ〳〵。賊徒二人抗ひなく〳〵討ひ取り。かくてもれ〳〵二の木戸
なんなく破れ家秋小栗の勢おし〳〵入り斬ひ入る。横山太郎安嗣、同次郎安春
此二人まんじ兄弟山行力丸相摸鬼王蟻門兄弟熊川父子打ひ入
こゝ所宗徒のりの。此所よ討ひ彼所よ討ひ今ぞ敵ひ
横山安秀と一色詮秀を討ひるりの色ぞ漏しやとぞ思ふ塞外の陣ふ
照天姫ぞ登小太郎。片岡又重青押を引ー並ーゞ忽ち使をりて云こーゝ
我く塞外ふあって。義朋兵を寄ふ処ふ雑兵の中ふ紛れ老兵の仕りを。
生捕ぞ入るふ安秀あてひゝ。いざ〳〵ひゝとぞ思ふ小栗家秋の
為ひ斜ぞ〳〵ぞ表び社房ひ入り給ふ安秀ぞ〳〵照天姫の父は能ぞ〳〵遥余

夜の御免もわれ〳〵。姫の御ふ仕ひ〳〵とあり給ふ小栗とれを聞ー〳〵甚
使ふ分付て還ふ。照天とれを父て大いふ喜び則ち横山を牽き出し。
小太郎ふ命じて郷を解しめ。容貌を正ー〳〵ひ〳〵。おん身ハ年ー叔父君ぞ〳〵。
今ハ天を共ふせざ〳〵の讐なれば。畏ひれども只今此所ふ〳〵討ひ
われと共ふ〳〵。青押ふ〳〵進ー出ー人ふ〳〵ふ名告ー〳〵。おこがましく〳〵
ともおんを仇と怨ー〳〵。縁故を知ー〳〵甚あ〳〵ほしを述ー〳〵。
奴家ぞ父ハ道外とて。ある先公の下僕ぞ。おん身主君武相摸川ふ失ひ
時よ法師よ付り給ふ。底のみ〳〵ぞ〳〵を辛ー〳〵脱出殿の横死を
姫君ふ生ー〳〵せ〳〵ふ主家亡び。ハ行衆を知ー〳〵はなく故郷ふ還りもぐの
よりを尋ー〳〵。何方までもハ在家を尋ー〳〵。甚ふ奴家を售ー〳〵後用と
なー。相撲の玉よ至ー〳〵ふ不図おん〳〵ふ捉へられ馬の秣よ飼ー〳〵

折から小栗ハふ云ん無なして。心の願を委しく申さく没命せしが。このさまを見て
仇とハ云へ。いたはしき者よと。涙とともに申されけるを。横山安秀ハ。
最前よりしてさし俯きゐたるが。何思ひけん立あがり側へよ
居たる雑兵の短刀奪ひ我と我が左りの腹に突立てどつかと座して照天に対ひ。
いと苦しげに息を衝ぎ姫青柳ハ女にて身を殺しても孝行をたてしにこそ根を
究めけるに我ハ男に在ながら恩義をわすれ不義をなせし身の非を知らバ恥か
しや。思ひ出せバ一昔應永辛卯の三春。名武が庭にて助太刀と恥を忍び
射損じて我拙なきを恥らふので。小栗が妬く思ひしに罵る光彼が才を愛し
姫をもて許嫁を我仇とおもふ余り人を害するの腹たてし。どれより名武殿
小栗を恨る光を我手にて殺しまた小栗を讒害せり必竟邪なる心
より善人を殺しより其後ハ我子の愛にひかれ。いよいよ悪事をなしける報ひ

天罪脱れがたく。一時に子ともに兄弟を殺し。現在姪の手に捉られて。七度自害の非を
知て後悔するに甲斐もなし。姫がためにハ嫉なれども。さすが伯父の名にめでて。介抱する
ものやと。わが自殺をバかくはからひたるぞ。是れハ我身の先非を悔ひたるを善と識さ。
せめての志ともなるべし。いざ主君くちおしく首討給へと照天を今さら小栗
善を攻めし叔父ハ父の仇なれども縁につながる隣の安秀声を励まし〆。
その甲斐もなき照天姫ハ其義勢に涙ぐみて当惑暫しなくて其首をば斬らずしてハ
我に苦痛さし給ハず殺すことなかれ。いでやそれがしの身は身を実をもって刀を右手に取らんとする。
照天とこれに私を励まし。いかに伯父こそ兄なれ父の仇にても我ハ畏こけれ
ハ首なりけれど腸絶とも。云へども長刀もちて雄々しくも後腹に押あてけるが
憐むべし横山が首ハ前にぞ落ちかけて此内にも猶々生けり気迫くて
怨をはらしてとめれバ臆くの約を易るべきや。と照天ハ心をとめて

小栗卷之十五
十二
金吾
横山首級
庁岡加二郎
義堂小太郎
照天
池庄司
小栗助重
四辺平八郎

小栗卷之十五
十三
小栗夫婦讐を討得て功成
松彩上人
家杉持房
結城持朝
青柳
色絵秀方

喜びを表わす刀をねぶり横山が髄をとて刺さりけり。此時照天は張てうけ
置き給ふ父の神主の前に横山が首を供へ香を焚南無父霊菩提の手向の
仇安秀と今日只今討ぶくまで向ひ給ふ徳利の若襲を免れ成仏得脱し
給へと懐舊の涙せきあへず念仏唱へ遍唱ゆきて昔柳も懐中より白父
道具が神主を出し小ふるに所に居ふきん涙をぬぐふ云りるに怨家横山
安秀どの奴家が力及ばねと姫君父の名信を添く憐みまふらせ今
仇を討さーまひね年次の五念仏晴けて速に成仏遂さしめ給へ南無幽霊
菩提生菩提と念ずとうーーが横山を刺さる刀をとり奪ひ我とろぐまに
ふつとと切れば人々はあっくふとと驚ひ。青柳涙あー拭ひ奴家が矛は
笑ふ憂恥ふまば速に死をべれなれどかなさに一つを父の菩提のため
又二つは怨家あぐふ。横山どのは主人の由緒の人に在ふ雑色宮那ふ

善右ふなりまひーとなれば仇はうきんも本意ふ
とさとそ貌を変るなれと語るを姫をとーめ人ーを慕みまるを
此ちりも賊塞俄に火発り蔵ことして燃れば美登小左衛門を
ふ對人賊既に亡ぶとおぼしきを大ぶをどなくほ凱旋めーと云も
終ふざるふ小栗家枚の表れ勢ふ作しまれば照天兄弟兄小栗
をおそ出迎へ引率て陳中ふ入じめ。ありし弥ふくを祥ふ述横山ふ効
首勇ふ入まーふば表将その効を賞ふるもおのぶ仇一色を脱逃るを
悔る附ふ。結城右衛一色注秀を郷め此陣中ふ牽ふり小栗ふ遣さ
いふりふ我是ぶ市堂ふ一ふ注秀を討ふんと紛ふれば前ふ注秀
武義の陣を生奔の船。その去向を窺ふーて正在を告ね。今まで此所を
逃去ふーもあふんと密ふまま勢をふも逃を生ぐれ地方ふ埋伏させふ。

果して忍び寄りて後より捕へくくこと叶ふまじきなり。是前の言を背ざるかなと。
注秀を小栗より召せば。助重天を仰ぎ地を喜び。是ぞ人ふ是下の信義ふ
よりぞ。年来の素懐を遂げなん。此恩いつか忘れもせんと深く感謝を述べたり。
扨房に對ひくやうを申さう。父ふ[illegible]結城の好意ふよりて年来の仇敵
捕はるる。足下も我も恨ハ同じ怨家。いざ諸ともに討んとあるふれ房
辞して云ふ。結城の一点を生捕しふ是ぞ足下の為とし我ハ
功なしふ。いつぞ[illegible]共ふ討べ死とのゝべ。足下一の太刀をなすべ。我
二の太刀を下さるべしと。譲ること再三再四ふ及び。しるべ。今ハとて助重一太刀を
[illegible]房二太刀を下して。注秀を三断となしぬる。両将生捕りて各
父の霊を弔ふ。同数年の本懐を遂げ感涙の涙ふむせびる。ありければ。
凱陣して。今日のるふ鎌倉殿ふ[illegible]へ。げんと既ふ陣を引拂うんとす。時夜を

神戸大学蔵

7